論文要約　　心理療法と現代の意識

―「非二」という視点からの考察－

橋本　　尚子

心理療法の歴史は、19 世紀のウィーンで Freud によるヒステリーの治療から始まったものであり、それに適した技法として誕生し、時代を彩る病とも言える心的症状—70 年代頃までは多かった対人恐怖、80 年代の境界例、90 年代に主流となった解離性障害など—に応じて様々な理論や心的構造論が生まれてきた（田中,2013）。しかし、現在では Wing による自閉性スペクトラム障害、発達障害や、発達障害的ではあるが発達障害とも言い難い“灰色の”発達障害、発達自体の非定型化が注目を集める中で、従来の心理療法や病態水準的な見立てが通用しないケースがでてきている。精神分析や心理療法、現場で治療に関わる治療者からも、どのようにすれば彼らの心的世界を捉えることができるのか、模索と研究が続いている状態と言える（広沢,2010；河合,2010，2013，2016；内海,2015；平井,2017 など）。

そのような中で、「発達障害」や、発達障害的な部分はあるが発達障害ではないという「発達障害のグレイゾーン」、あえて葛藤しない「モードとしての発達障害」という言葉で表されるような心性を、現代的な心性ととらえて理解することで、心理療法の可能性について考えることを本研究の目的としたい。

第 I 部理論編の第 1 章で、従来の心理療法が前提としていた意識と、発達障害も含む、現代的意識の違いを述べている。日本ではこれまで広くロジャーズ理論が受け入れられ、教育現場のみならず、カウンセリングと、受容・共感・治療者の中立性というのは切り離せないイメージとして定着していったといえる。ロジャーズ派ではなくとも、このような治療者の態度は、カウンセリングの一般的あり方と考えられるようになっていった。

しかし現代では、この受容や共感的理解に基づく言葉によるカウンセリングが成立しにくくなってきている。従来のカウンセリングは、クライエントの葛藤する力や内面化の能力を前提にしていたといえるが、様々な感情を内面に保持しにくく、葛藤しないため悩みや苦しみが語りにくいというクライエントが増えてきたためである。

葛藤が生まれるとはどういうことかを考えるとき、河合（1988）の言葉「一が一であるかぎりわれわれは「数」ということを意識するはずがなく、何らかの意味で最初の全体的なものに分割が生じ、そこに対立、あるいは並置されている「二」の意識が生じてこそ、「一」の概念も生じてくると考えられる。二はこのように分割、対立を仮定するものであり、葛藤と結びつきやすい」を参考とした。この言葉

を手掛かりとして、従来のカウンセリングが通用する心的構造を「二」が成立している「二の意識」、葛藤に耐えられないのではなく、葛藤しないという現代的心性を「非二の意識」と捉えられるのではないかと考えた。

「非二」の意識には、葛藤しようとしてもできない本質的な発達障害から、あえて葛藤するような現実に直面することを留保する「モードとしての発達障害」である現代的心性まで幅があるが、「主体意識の希薄さ」という点では共通する部分が多いといえる。また発達の一段階としての「非二」的状態もあれば、「非二」が常態となっているものもあり、「非二の意識」は、その両方を含んでいる。

この「非二の意識」という視点を手掛かりに、第 2 章では、「非二の意識」の発達的側面を、主に Balint と Winnicott を中心とした従来の理論との比較から検討することを行った。Freud が三者関係成立後の患者を扱ったのに対し、Balint も Winnicott もともに、まだ三者関係が成立していない患者や、二者関係成立にいたるプロセスを丁寧にみている点が、神経症構造を持てず葛藤保持力のない現代の意識の発達を考えるにおいても参考になると考えられたためである。

Balint では今まで精神分析ではあまり注目されてはこなかった「創造領域」という領域が、この現代的な葛藤のない意識を考えるときに示唆深い。この「創造領域」は転移・逆転移もなく、何かが生み出される領域であると Balint は述べており、「非二」的心性から対象が発生することを考える時に病態水準以外の視点を与えてくれることがわかった。

Winnicott の理論も、二者関係成立以前を扱っており、二者関係発生にいたる前の母親側からの適切な環境の供給により、自他分離がどのように生じるのか、子どもの身体感覚や「私」という意識の発生などが述べられており、「非二」の意識においての自他の分離、「私」という感覚や「他者」という感覚の発生を考えるにあたり、参考となる視点を多く含んでいた。他の精神分析的視点、Jung 派の視点からも、「非二の意識」の発達論を検討した。

第 3 章では上述した知見を踏まえ、「非二の意識」における治療論について、精神分析的視点、Jung 派の視点からも検討した。両者に共通するのは、「非二の意識」を持つクライエントの心的世界を理解するには、治療者の反応、逆転移が非常に重要であるという知見であった。

第 I 部で明らかにされた観点から、第 II 部事例編では、本テーマを考えるにふさ

わしい自験例 7 事例を取り上げ、考察を行った。自閉性障害などの発達障害や、現代の意識とも考えられる事例を「非二」の事例として、プレイセラピー1 事例（事例 A)、成人の事例を 3 事例（事例 C,D,E）の計 4 事例、また従来の心理療法が通用しやすいものを「二」の事例としてプレイセラピー1 事例（事例 B)、成人の事例 2 事例（事例 F,G）の計 3 事例を検討した。

第Ⅲ部考察の第 11 章では第Ⅱ部での事例編から「二」と「非二」の世界の特徴を検討した。両者の違いを検討するためにまずプレイセラピーに焦点をあてた。プレイセラピーは言語を介さずイメージとして展開していくという特徴があり、「二」と「非二」の両方の世界の特徴と違いを明示すると考えられたからである。大きくは 1．構造について、2．関係性から、3．リアリティ・リフレクションという視点に絞り、それらの分析の視点に基づいて総合的に考察を行った。

構造について、「非二の意識」を持つと考えられる事例においては、他者と自分という分離が生じることや、場所や空間が区切られ、外側と内側が生成されることが心理療法のプロセスで生じることが非常に意味を持つ点などが、「二の意識」の事例とは異なることが見出された。「二」においては、最初から場所や他者、また内側や外側が明瞭であるのに対し、「非二」においては、場所や他者が面接の経過に従って発生していくことが見出された。

関係性については、「二」と比べ「非二の意識」においては、治療者自身に困惑するような体験や、治療自体に意味があるのかという感覚、治療者自身に自分であることや、自己主体感（Knox）を呼び戻されるような体験が心理療法のプロセスで生じることが見いだされた。「非二の意識」の場合には、「二の意識」の事例以上に治療者の反応、心の在り方がクライエントに影響を及ぼすといえる。「二の意識」の事例では、治療者が共感しやすく事例の流れも読みやすく、従来の心理療法における考え方で対応できる部分が多いが、「非二」においては、物語的に事例を理解するよりも、瞬間ごとの自己感の生成、それらが蓄積されて心というスペースがいかに生成されていくかという視点が意味を持つことが見いだされた。

リアリティ・リフレクションでは、主に、「身体」、「言葉」、「鏡」などについて考察を行った。「身体」について、「非二」においては、「自己感」に関連する身体感覚の生成が、すでにそれらが成立している「二」の事例よりも大きな意味を持つことが考えられた。「言葉」について、「二」においては既に主体が成立しており、

その主体から語られる言葉を前提とした従来のカウンセリングが成立するのに対して、「非二」においては、言葉が発生することや、言葉のやり取り自体が主体を生成させるプロセスでもあることが考えられた。「鏡」のイメージについては、自己像の同定というのが「二」における鏡イメージの機能であるのに対して「非二」では、鏡に「他者」をいかに見出していけるかというのがテーマとなることが考えられた。

第 11 章において、「非二」の世界にも何らかの形で発生する「二」が重要であることが見出されてきた。第 12 章では、それらの知見を踏まえ、そのような「非二」に現れる「二」の契機として、主に「他者」「隙間」「身体」という三つを重点的に考察した。

まず「他者」は固定的に考えられるべきではなく、セラピストであることもあれば、何らかの障害物であることもあり、違和的なものとしてとらえられることが考えられた。そして他者との出会いが、「非二」なりのリフレクションを生じさせ、リアリティに触れることにつながることが見出された。またリフレクションのあり方も、「二」の意識の場合は全体から自分を眺めることにより、今までの自分との違いが意識されて終結にいたるのに対して、「非二」の意識の場合には、自分がばらばらである感じや、空虚であることそのものを夢、身体、心理療法から自分で認識できるようになることがある。これが「非二」なりのリフレクションとして非常に意味をもつ側面もあることが考えられた。

「隙間・スペース」の生成が「非二」の夢や箱庭などで現れることについては、事例や、古代の隙間や裂け目についての Jung の考察なども参照しつつ、内面化や物語の発生との関係があるのではないかと考えられた。

「身体」については、「自己感」と関わる体験レベルでの「身体としての自己感」の生成が非常に意味を持ち、「非二」からリアリティのある世界との出会いとも関わることが見出された。

これまで、個々の事例の検討や、第 11 章、第 12 章などからも、「非二」において、出来事のネガティブな側面である「かなしみ」や「傷」、嫌と感じる自分の感覚などが、まるでなかったことのように自分で否定される側面が見いだされ、そのような中から主体が発生する際に「傷」や「暴力」が関わることが示唆されてきた。第 13 章では、その点について、Jung 派の Hillman の述べる錬金術における「塩」

と「硫黄」の精製という視点から考察した。「塩」は主観性の基盤であり、自分自身の「涙」や「傷」から生まれるものであり、人にリアリティの感覚を与え、地に足をつけさせる力を持つと Hillman は述べる。また出来事を単なる出来事から、私の経験へと深化させる時に、なくてはならぬものでもある。そのような「塩」の生成は「二」においても「非二」においても大切であるが、「二」の場合であれば、人生の中で自然に生じる「傷」の体験があるのに対して、「非二」の場合には、そのような自然な形での「傷」がなかったことにされてしまうなど、「傷」を自分で感じることが難しい側面があり、心理療法の経過の中でやっと「傷」が認識されるなどがみられる。よって「非二」の心理療法では、「二」の場合以上に心理療法における「塩」の精製が大切な意味を持つことが考えられた。

また「硫黄」には、外側へと向かわせる力があると、Jung が外向との関連から捉えている。それと関連し、Hillman は、「塩」が必要な時に我々は間違って「硫黄」を手にするとし、出来事についてかなしみ、自らの涙などの内向の状態から何か大切なものを得るべき時に、間違って過活動や暴力など外側へと向かってしまう我々の傾向について述べており、内省に向かいにくい現代的意識を捉えるときにも示唆深い。しかし「硫黄」には、生命の熱を与える側面もあり、硫黄の力が偽の外向に向かわず、正しく精錬されるならば、人をリアリティにも触れさせる力を持つという錬金術の知見は、来談当初は問題行動でもある衝動性や暴力が、クライエント自身の生きる力に変化していくという事例の検討からも支持されるものであった。

最終章である第 14 章では現代の意識と心理療法について全体的に考察を行った。「主体意識の希薄さ」が問題になる「非二」の治療ではセラピスト自身の主体性、自己主体感、自由であることが問われることが見出されてきた。しかし、セラピストが主体性を発揮する時に、恣意的なものであっては治療的にはならず破壊性をもたらし、逆にクライエントに沿いすぎて、受け身的になりすぎては、治療者の主体性が発揮されず、それはそのままクライエントの自己主体感が生まれる契機も否定することになる。そのようなジレンマについて考えるにあたり、河合のいう「非個人的関係」を参考に考察を行った。河合は意識のレベルを深くし「非個人的関係」の領域に支えられることによって、そこから生まれてくる個人的感情もあるということを述べている。これは、心理療法の中で、セラピストが個人的感情を自由に表

せることが恣意的な勝手なものではなく、深い関係性から生まれてきたものであり、セラピストの個人性と、関係性が両立されているところが特徴である。

発達障害的な心性、「非二」の意識に対して、セラピストの主体的、積極的関与が大切であることも言われるが、セラピストの主体的関わりや積極的関与が、事例から離れた単なる独りよがりで恣意的なものにならないためのヒントが、難しいものではあるが、ここにあるように思われる。

葛藤を保持する能力のあるクライエントを対象として発展してきた従来の心理療法のあり方が通用しにくく新たな治療的関わり方が模索されている中で、本論文では、現代的な意識の特徴について考え、新たな心理療法の可能性について考察を行ってきた。現代の意識、「非二」に対しての治療では、クライエントの新たな意識の発生の契機に、治療者の自己主体感、主観性、生身を曝すことなどが非常に重要であることが見出されてきたが、その治療者の主体性の発露の底には、河合のいう「非個人的関係」や「かなしみ」が大切な役割を果たすのかもしれない。